

小宮豐隆監修
中村俊定校注

校本芭蕉全集

第五卷

連句篇
(下)

角川書店

校本 芭蕉全集
第五卷



昭和四十三年三月十五日 初版發行

定價 一三〇〇圓

著者

中村 俊定
大島 篤藏
島居 篤

發行者

角川 源義

印刷者

中内 佐光

製本者

鈴木 俊一

發行所

株式會社 角川書店
かど かわ しよ てん

東京都千代田區富士見二ノ十三
振替口座 東京一九五二〇八番
電話東京(265)七一一(代表)

Printed in Japan

曉印刷・鈴木製本

落丁・亂丁本はお取替え致します

連句篇(下)

中村俊定校注 元

三

元祿五年

二五四 鶯 也

(歌仙)

二五 破風口に

(歌仙)

二冥名月也

(半歌仙)

二七 青くても

(歌仙)

二五 荊かぶや

(歌仙)

二晃 秋にそふて

(三句)

二六〇 けふばかり

(歌仙)

三口切に

(歌仙)

III

一九

二五

二元

III

三五

三九

४३

四四

四八

元禄六年

- 三二 月代を (十八句)
 三三 水鳥よ (歌仙)
 三四 寒菊の (三句)
 三五 洗足に (歌仙)
 三六 打よりて (歌仙)
 三七 木枯しに (半歌仙)
 三八 としわすれ (三句)
 三九 両の手に (歌仙)
- 三〇 菟菟に (歌仙)
 三一 野は雪に (歌仙)
 三二 梅が香や (三句)
 三三 人声の (二句)
 三四 風流のまこと (歌仙)
 三五 春風や (二句)
 三六 春嬉し (三句)
 三七 篠の露 (歌仙)

六 七 八 九 一〇 一一 一二

一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九

九二
九六
一〇〇
一〇四
一〇八
一一三
一二六
一二七
一二三
一二五
一二六
一二九
一三三
一三七
一四一
一四四
一四六

元禄七年

三二	水鶏啼と	(歌仙)
三〇	世は旅に	(歌仙)
三九	やはらかに	(二句)
三八	新麦は	(歌仙)
三七	紫陽草や	(歌仙)
三六	卯の花や	(二句)
三五	空豆の	(歌仙)
三四	水音や	(半歌仙)
三三	八九間	(歌仙)
三二	八九間	(歌仙)
三一	五人ぶち	(歌仙)
三〇	傘に	(歌仙)
二九	むめがゝに	(歌仙)
二八	雛ならで	(三句)
二七	長閑さや	(三句)
二六	年たつや	(八句)

二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一

一九七
二〇一
二〇五
二〇九
二一三
二一七
二二一
二二五
二三〇
二三一
二三五
二三九
二四三
二四七
二五〇
二五一
二五二
二五三

年代未詳之部

三〇 松茸や (十六句)

三三 づくと (歌仙)

三三 松茸や（歌仙）

三三 松風に (五十韻)

三言猿蓑に（歌仙）

三五 升買て
(歌仙)

三六 鵲もはや
(歌仙)

三毛 秋風に (三句)

三
爍の夜を
(半歌仙)

三
此
道
也
（半歌仙）

三四 白菊の（歌仙）

一 抱あげらるゝ

二 もえかねる (二句)

三古寺や（三句）

四 香炉の灰 (二句)

五 麦に来て (二句)

二五三

二五五

二五九

三六三

二六八

三十一

二七六

三〇

二八

二八三

二八五

二九〇

二九〇

二九一

二九二

二九二

三	三	三	三	元	六	七	六	五	四	三	三	二	一〇	九	八	七	六
桜をこぼす	やしきの客は	笠寺や	空也の鹿の	入相の	庭に籬を	鐘つく人も	煤掃の	薄原	冬の砧の	笠敷て	霄の間は	亀山や	枯はてゝ	ころ／＼と	ぼんとぬけたる	打こぼしたる	鉦一つ
(二句)	(二句)	(三句)	(付句一句)	(二句)	(二句)	(二句)	(二句)	(三句)	(二句)	(二句)	(二句)	(二句)	(二句)	(二句)	(二句)	(二句)	(二句)

三〇三
 三〇二
 三〇一
 三〇〇
 二九九
 二九八
 二九七
 二九六
 二九五
 二九四
 二九三

存疑の部

一	小傾城	(八句)	二四	綿ふきありく	(三句)
二	松杉に	(十句)	二五	端居がちなる	(三句)
三	いざかたれ	(歌仙)	二六	門に入れば	(二句)
四	赤人も	(二句)	二七	石も木も	(二句)
五	百景や	(三句)	二八	名残ぞと	(二句)
			二九	革踏皮の	(二句)
			三〇	右左リ	(二句)
			三一	うき恋に	(二句)
			三二	庵寺の	(二句)
			三三	引おこす	(六句)
			三四	菅簍の	(二句)

三〇	三〇	三〇八
三一	三一	三〇七
三二	三二	三〇七
三三	三三	三〇六
三四	三四	三〇六
三五	三五	三〇五
三六	三六	三〇五
三七	三七	三〇四
三八	三八	三〇四
三九	三九	三〇三
四〇	四〇	三〇三

点 卷

解 説

延宝年間

一 批点懷紙

(断簡四句)

三二

参 考

一 松の花
二 のたりく(歌仙)
(付句一句)三九
三三

三 深川や

(二句)

三九

三 湖水より

(三句)

三八

二 あかくと

(二句)

三八

二 重々と

(歌仙)

三四

九 寂しさの

(歌仙)

三〇

八 杜若語るも

(二句)

三九

七 いささらば

(六句)

三八

六 ひよろくと

(二句)

三八

島居 清校注 三五

三七

貞享年間

二 とはなしに (歌仙)

三三

三 あたゝかに (歌仙)

三三

四 中く (表六句・付合十五)

三三

五 落葉照ル (歌仙)

三三

元禄元年

六 むもれても (歌仙)

三三

七 簾かげや (歌仙)

三三

年代不詳

八 春雨や (歌仙)

三三

存疑の部

一 梅接て (歌仙)

三三

連句篇補遺

大谷篤藏校注 三三

はしがき

三六四

天和二年

一 田螺とられて (世吉)

三六五

二 月と泣夜 (歌仙)

三六〇

三 露 呀 て (二十四句)

三六四

補注

三六七

概説

芭蕉が自覚して俳風変化を実践したのは『次韻』からというべきであろう。『次韻』から『冬の日』への展開の過渡的役割を果たしたのが『虚栗』、すなわち天和調俳諧であるが、これらは貞門俳諧の類型的連想や、談林俳諧の散文化的傾向への抵抗としてのもので形式上の革新であった。

しかし『冬の日』以後の変風はそうした形式的、対俳壇的なものとしてではなく、自らの内性的な深まりの結果であって、さまざまな生活体験や思想体験の上に成立しているものである。

生命を賭けての奥の細道の行脚において、芭蕉は大自然の偉大さに感じ、素朴な人情にふれ、栄枯盛衰のあとを見、あわれむべき人間の宿命を悟った。そして俳諧師として生きる意義を反省した。

「誠」をもって俳諧の根本とし、「不易流行」をもってその姿と考えるにいたったのである。猿蓑時代をもって蕉風の完成期と考えられるのは、こうした根本理念の確立という裏付けがあったからである。

「俳諧の花は新しみにあり」と説破した芭蕉は、俳諧の本質を「まこと」であると体得した後も、その地に足をとどめてしまうことなく、たえず反省を怠らず新しみへの工夫に専念した。しかし彼は、どこまでもその伝統を重んじ、現在の俳諧の現実の上に立って、本来の一筋を見失うことなく変風を心が

けていたのである。門人土芳は師の俳諧に対する態度について

亡師つねに願ひにやせ給ふも、此あたらし新みの句也。その端を見知れる人を悦びて、われも人もせめられし所也。せめて流行せざれば新みなし、新みはつねにせむるがゆへに、一步自然にすゝむ地より顯るゝ也。(三冊子)

と語っている。

晩年にいたって提唱した「かるみ」の風調も、こうした新しみへの希求精進の結果にほかならない。「かるみ」の語については、すでに元禄三年頃表現上の一工夫として用いた例はあるが、これをもつて新しい俳諧の指導原理と考えるようになったのは、帰江後の元禄五年頃からと推定される。

こうした考え方をもつようになった直接的動機は、当時の江戸俳壇、殊に蕉門連の旧染沈滞に対処するためであったが、大局から見れば、彼自身世界観上の変革期を迎えていたということであろう。

当時江戸には蕉門の長老其角・嵐雪が門戸をはっていたが、芭蕉の新風からはすでに遠い存在であったし、もっとも身近な作者であった杉風や桃隣すら、当時流行の点取や手帳俳諧に正道を見失いかけていた。「風雅三等之文」はこうした江戸俳壇の現状に対する批評とも見られよう。

従って帰江後の芭蕉の指導の相手は江戸在勤の諸藩士（主として大垣藩）や、曲翠・酒堂・乙州ら江戸在留の近江蕉門の連衆、それに地元の沾圃・里圃・馬寛などの能役者連、野坡・利牛・孤屋・岱水・利合等の町人グループなど、蕉門初登場の顔ぶれが大部分であった。このことは新風を志向する芭蕉にとつては好都合で、彼らは既成觀念にとらわれることなく素直にこれを享受したことであろう。